

## 第3回 文化とことばのコラボレーション

筑波大学・文化とことばのコラボレーション実行委員会

1月18日に、「第3回文化とことばのコラボレーション」を開催した。第一部は、留学生および日本人の学生による28件のポスター発表が大学会館3階ホール前のホワイエにおいて行われた。留学生が日本語で「日本でびっくりしたこと」をテーマに発表したり、日本人の驚く自国の風習やマナーについて紹介するなど、学内外からの参加者の興味を引いていた。また、CEGLOC日本語部門の「プロジェクトワーク日本語」の活動成果が報告された。第二部は落語家の林家染雀師匠を迎え、大学会館4階和室で「留学生のための落語会」の公演が行われた。「留学生のための落語会」は留学生に日本語の面白さを味わってほしいとの思いから、日本語教育部門で2001年より継続して開催している。今回は上方落語を取り上げたが、江戸落語との違いなど参加した学生から活発な質疑応答が行われた。また公演の色どりとして中国とブルガリアの大学院生による漫才も披露された。

## 英国の大学における日本語教育

藤野華子（オックスフォード・ブルックス大学）

英国では現在24校で日本語、または日本学の学士課程が開講されており、3校では博士課程も設けられている。学士課程に入学する学生の88%はフルタイムの学生で、87%は高校からの進学者だ。男女比では女子の方がやや多く(58%)、3分の2の学生は、まったくの初心者として入学している。

日本語の授業時間数は大学により異なるが、新入生は、週に平均5時間授業がある。それに文化、歴史、現代社会、といった教養科目を加えると、週に約13時間講義があることになる。日本語の教科書は「みんなの日本語」(スリーエーネットワーク)が多くの機関で使われており、構文シラバスが採用されている。教師一人当たりの学生数は機関により大きく異なり、少ないところで10人、多いところで38.8人である。また6割の大学では3年目、あるいは2年目に1年間日本に留学するようになっている。

日本語のカリキュラムはJLPTやCEFRといった一般的な基準を採用しているところは少なく、独自の基準で組まれているところが多い。知識とスキルのバランスを取ろうとしたものが多く、4年生では知識よりもスキルを重視する傾向が見られる。最終的な目標到達レベルは多くの機関がN2-N1を定めているが、実際の到達度には幅があり、N3からN1である。そして、入学当初は約3分の1いる既習者だが、4年目にはゼロ初級で始めた学生とほとんど差がなくなることが報告されている。

## ウズベキスタンと本学における日本語教育のアーティキュレーション

菅野玲子（タシケント国立東洋学大学）

菅野玲子先生は1989年より、タシケントに教育・研究の場を移され、本学の協定大学でもあるタシケント国立東洋学大学において、大変情熱的な教育を行っていらっしゃる。2016年11月に日本政府より瑞宝双光章を受賞され、国際室中央アジアタシケントオフィスの仕事も御担当されていることから、本学を訪問された機に、ウズベキスタンの日本語教育事情を質疑応答の形でお話しいただいた。昨今の学生の日本語への興味、日本語学習への取り組み方の変化、それに伴う教育側のゴール設定や授業内容の改善、そして、修了生の活躍など、本学へ留学した学生のケースも挙げながら具体的に話されたことで、本センターとの強い関わりを再認識した。

また、毎年日本研究者を招聘し、集中講義、シンポジウムなどを御企画、運営されている内容についても、今後の日本語教育研究のあり方、日本研究との関わり方についてお話しいただき、非常に示唆的なものであった。その他、ウズベキスタン国内における日本人捕虜墓地の整備や、ナポイ劇場の日本人抑留者の功績を記したプレート作成、ウズベキスタン政府外務大臣賞も贈られていることなど、日本とウズベキスタンとの関わりについて興味深いお話を伺った。